

市民芸術祭・みどころ(3)

特別企画 ジュニア・シニア絵画展示

・2月26日・27日 9:00～18:00(最終日は17:00) 展示室・小ホールホワイエ

1、ジュニア絵画展

「狭山青少年美術育成会」が、毎年の事業として、市内小学校に呼びかけて募集した入賞絵画です。この会は、今の子ども達がかかえているいろいろな問題点を憂え、絵を通して健全に育ててほしいと願って有志で組織した会で、協賛者として市内の多数の事業主の支援を得て活動しています。

その目的は、(1)子ども達の夢や希望、思いや願いなどを絵で描くことで、彼等の内面を育てる。(2)その作品を、公共施設のみならず、会員の宅や協賛者の各場所に展示して、子ども達の心のうちを大人にも知ってもらう。この2つです。

毎年、テーマを与えて募集、第5回のは「わたしの宝もの」です。

絵は、描いた人の心を映し出すもので、ことに子どもの絵はそれが顕著に現れます。バラエティに富んだ題材が描かれた中で、親の像やその働く姿、一家団らん、家族でピクニックなど、足元を見つめた幸福を大切にしている今の子ども達の心情が吐露された図が多くあったことに興味を惹かれます。

2、シニア絵画展

「ウルトラ21アート集団」は、絵の好きな人たちの集団です。自分たちで描くだけでなく、いろいろな所へ出かけて一緒に絵を楽しみながら、心の交流をはかっています。活動の場は、小学校であったり、中高年の集まりであったりと多様です。

画面を見ないで描く対象だけをよく観察して線描きし、対象の色にとらわれず、自由な色で彩色するというのが描法の特色です。

今回出品のものは、ある老人ホームでの活動の結果の発表です。70代から90代の方々の数々の絵をご覧ください。
(狭山市美術家協会 水村 昭)

読む俳句から見る俳句へ ---- 新しい表現を求めて ----

自分が感じたこと、思ったことを文字にして表そうと考えたとき、俳句という簡潔な形式は多くの人にとって最も適切なものではないでしょうか。だが、現在は活字離れ、本離れの傾向が著しいようで、ことに十七文字に制限された俳句は、俳句をつくる人が読者そのものというタコツボ化した文芸です。十七文字の字数は変える訳にはいかない、季題も除く訳にはいかない、となれば、あとは表現の場を考える他はありません。何へ書くか、何処へ書くかです。

これを工夫しない限り、俳句は『売らず、買わず』の自己消費の域を脱することはできないでしょう。

狭山市俳句連盟は、今回の市民芸術祭を前に「読む俳句から、見る俳句へ」のテーマを掲げました。その結果にどれくらいの人立ち止まってくれるか、私は期待してその日を待っています。
(狭山市俳句連盟 今坂 柳二)